

INTERVIEW

日本語教師 尾島ヴァンダメイ幸香

日本語教師と聞くと一見、堅苦しいイメージが多い職業と思いきや、インタビュアの合間に見せる和やかな笑顔は教師というイメージよりは、学ぶ心を導いてくれる友達のような印象さえ覚えた幸香先生。今夏はそんな彼女にクローズアップしました。



編 日本語教師を目指した理由は何ですか？

最初は特に目指したつもりはなかったんですけどね。日本で国語教育や学校教育に携わっている中で、次第にその業界の全体図が見えるようになってきたときに、もう少し歳をとる前にもっと広い世界も見たいと思うようになっていったんです。そして色々調べているうちにワーホリの制度を知って、中でもオーストラリアは日本語教育が盛んであることから、「国語」を違う角度から見る(外国人に教える)という目的に辿り着きました。そんな理由で豪州入りして、日本語教師をしてみたらそのままこちらの方が面白くなってしまっただけに今に至っています。

編 日本語教師をやっていたよかったと思うことは？
長年やっていても、かなり頻繁に自分の知らなかった世界を垣間見られたり、そのことによって自分自身が常に成長していけることが実感として感じられたり、あとは世界中の様々な人との出会いが常にあることですね。それと純粋に自分の教えたことを学習者が使ってくれてコミュニケーションをとっているのを見ると、とてもうれいんです。なにより「先生に会えてよかった!」「先生の授業おもしろい!」とか言ってもらえたときに日本語教師をやっていたよかったなあと思います。

編 日本語教師の経験の中で逆に大変だと感じることはなんですか？

日々やりがいを感じる反面、大変だと思うことも実は毎日ですよ(笑)。一例を挙げるとすると、実際に授業のために費やす時間という意味では、膨大になっていると思います。授業準備を始め、日々変化していく日本語学習者の多様性やそれぞれのニーズについて調べたり、分析したり。やるべきこと、やっておきたいことは何年経っても全くなきこと、と言ったか、むしろ増えていくとか言うか。でも結局はそれもすべて自分の財産になっていくので、学習者の笑顔を見られることにつながっていくので、実際は日常では「大変」とは意識していません。

編 教師として長いキャリアをお持ちですが、今までに大きな失敗がありましたか？又それからどのようにして立ち直りましたか？

まだ日本の塾で国語を教えていた時の話になりますけど、いいですか。まだ19か20歳くらいの若いときの教師駆け出し時代の話です。養成講座の受講生にも時々話すんですけど、私のせいで一人塾の生徒がやめてしまったことがありました。その生徒自身がやめたてやめたというよりは、「お母さんがやめさせた」という流れだったんです。どうやら私が授業内で小説が何かを讀み上げた時に漢字の読み間違いをしらしく、その生徒がその読み仮名を自分のテキストに書いていたらしんどいんですね。それをお母さんが発見して云々な塾には通わせられなくなったようにしてんですよ。で、この日から私は研修時代同様に再び毎回の教案、授業プランの提出をするように言い渡されたんです。自分の失敗は失敗だし、それで会社の損害に繋がることをしてしまっただけに、当然といえは当然なんですけど、まあ単に凹みまじったね。提出している教案も、トナーや上司が見て何か言ってくるわけでもないし、見てもらえるのかもわからない感じでした。でも、このことがきっかけで仕事や授業準備に対してストイックに取り組むという今の私の基本的なスタンスにつながっていると思うんですよ。なので、結果的には駆け出しの若い頃にならった経験が、結果的にやらされたのは貴重なことだったと思っています。それをどう乗り越えて立ち直ったかというの具体的な何かがあるわけはないんですけど、自分のプライドでか。はいんじやないかとか、この仕事を辞めた方がいいかとか、いろいろ考えたりもして悩んだんですけど、好きでやっているという気持ちが強かったのと、このまま終わらしたと思っただけで辞めるのは遅くないけど、まだそうは思えるほど何もしてなかったです。失敗は成功のもととはよく言いますが、失敗をどれだけ次のステップに活かせるかは自分次第じゃないかと思うんですよ。失敗はある意味「チャンス」って言うんですかね。

編 信念や強い意思を持っていても凹む時はありますよね。笑顔でいられたためのストレス発散法はなんですか？

多分、あまりストレス自体をためていない方じゃないかと思えますね。人と比べられないんですよ。わからなくていいです。毎日の大半の時間を過ごしている学校での生活そのものが私にとってはストレスを解消する方法でもある気がします。そこでストレスもたまらないようにして、同じところでストレスも解消している気がします。例えばなんでもそうなんですけど、スタッフとのやり取りとか、教室での受講生とのやり取りとか、日本語を習いに来ている学習者とのやり取りとか、全部ストレスになっていることもあるんだらうけど、むしろそれらが私にストレスを解放してくれていることが多い気がします。

編 日本語教師をしていなければ何をされていたと思いますか？

んんんかかなか考えづらいですね。日本ではバンドや芝居に没頭していた時代もあつたんですけど、やっぱり、教育者には変わりないかもしれないですね。30代前半のころまでは、実は自分のことを教育者と呼ぶことに抵抗がありました。自信がなかったんです。私こときに教育なんて語っていいのかわかって思っていました。国語や日本語が好きだから、この仕事をしているって逃げ道を自分で作っていました。でも今思うと30歳そこそこ教育でも何でも自信を持って語れていたら、そっちの方が嘘ですよ。普通に思っていますね。仕事だけじゃなく人生経験だってまだ浅いわ。今でももちろん、そう言った意味ではまだまだだっけと思う部分はたくさんありますけど、少なくとも自分が信念を持ってやって来たことに對する結果がしっかりと見える状態までは来たので、堂々と自分は教育者になりました。と言え、堂々と自分になりまして。そう言った意味で、教育者以外のことをしている自分は全く想像できませんね。(笑)



Profile

明治大学日本文学科を卒業後日本国内で大手私塾、高校などで国語科指導、渡豪してニューサウスウェールズ大学大学院応用言語学修士課程、シドニーにて日本語教師養成講座を修了。その後日本語学校及びニューサウスウェールズ大学日本語科にて講師を務めた後、現在はJALCの教務主任として日本語教師養成講座および日本語クラスの教務一般を担当。

今回のインタビューでお世話になった

日本語教師養成講座のJALCに興味のある方はお問い合わせを



Mail: info@jalc.com.au

Tel : 02-9238-3994

Suite 301, Level 3, 332 Pitt St, Sydney 2000

編 今現在、何をしたいかわからない、手に職をつけたけれど、何をしようか迷っているか方にメッセージを。
日本語教師はやっぱりお勧めですね。日本から海外に出てきている人になら尚更思います。日本語や日本文化を教えることは、自分について知ることでもあるし、世界の中の日本を客観的に分析することでもあります。これからの世界で生きていく糧やステップと捉えたとしても本当にお勧めですね。もちろん、一生続けていける仕事、女性も活躍できる仕事という意味でもお勧めです。
編 では最後に将来の夢は...?
世界中で日本語教師として活躍している養成講座の卒業生の活躍ぶりを見に旅行をしながら会いに行くことですかね。今日本にいる校長もよく言ってますけど(笑)。本当は私もオーストラリアにこんなに着くつもりじゃなかったんですけど、もっと色々な国に行って日本語を教えたみたいと思っていました。でも今はそれを教えた子たちが実現してくれているので...